トップの素顔

vol. 5

株式会社システム研究所
代表取締役

梅田（うめだ） 憲一（けんいち） 氏

相手を思いやる心を持って前に進む

【プロフィール】

昭和 28 年福井市生まれ。立教大学社会学部卒業。昭和 52 年㈱日刊福井入社。
昭和 60 年財団法人 福井県中小企業情報センター入社。平成 4 年㈱システム研究所設立。
福井商工会議所常議員、県都みらい創造委員会委員長の他、県都にぎわい創生協議会座長などの公職を務める。

【会社概要】

設立：平成 4 年 4 月　　所在地：福井市御幸 2-17-25
電話：0776-24-8118　　従業員：45 名

普段、垣間見ることが出来ない福井商工会議所の議員の素顔を探る「トップの素顔」。今回は㈱システム研究所代表取締役の梅田憲一氏にお話を伺いました。

初モノづくしの学生時代

昭和28年福井市に生まれ、宝永小学校時代は神明神社の境内や福井県庁のお堀端で遊ぶ活発な子どもだった。明道中学校に進学した昭和40年代はグループサウンズの黄金期。大人気を誇ったザ・タイガースなどをコピーし、同中学校では初の屋外コンサートを開催。自身はリズムギターとリードボーカルを務め、大いに会場を盛り上げた。

高志高校では一転し山岳部に在籍。入部当初は部員も少なく、県大会では奥越地区の高校が幅を利かせていた。何とかこの牙城を突き崩そうと、来る日も来る日も高志高校から足羽河原を経て、足羽山頂上の仏舎利塔までランニングの猛練習に励んだ。また遠征で立山や白馬、穂高の山々を走破するな

ど体力作りにも取り組んだ結果、同高校の山岳部では初のインターハイ出場を果たした。

立教大学社会学部に進んでからは演劇部に入り、戯曲の台本づくりや練習に没頭。学園祭ではバックミュージックに「東京ブギウギ」を流すオリジナルストーリーで、同大学では初となる一週間の連続公演も成功させた。

パソコンで情報化を支援

大学に進学して間もなく父を亡くし、学生時代は学費と部費を捻出するためにアルバイトにも精を出した。中でもフリーペーパーの雑誌記者は忘れられない経験だとか。自身が面白いと思う記事を出版社に持ち込み、採用されれば報酬が出る仕組みで「マイペースの自分に合っていた」と振り返る。

この経験が就職へと繋がり、大学卒業後は創刊されたばかりの新聞社「日刊福井」に新卒第一期生として就職。7年間にわたり県政を担当。特ダネを掴むために土日返上で奔走し、幅広い人脈づくりに繋がった。

その後、ビジネスの情報化に向けて県が準備を進めていた㈶福井県中小企業情報センター（現：（公財）ふくい産業支援センター）の創設に加わった。

当時はオフコン全盛の時代で、企業が導入するには数百万円のコストを要し、中小企業にとっては高嶺の花だった。何とか低コストで県内中小企業の情報化をサポートしたいと、夜学のプログラミング教室にも通うなど猛勉強に励み、オフコンに比べて廉価なパソコンを用いた情報化の支援に向けて試行錯誤を繰り返した。

一方、中小企業を支援する中で、企業から「導入はどこに頼めば良いのか」という声を多く受けるようになった。当時のパソコンはコンピュータ好きのマニアが関わるマイナーな存在で、自信を持って勧められるベンダー（システム会社）は限られていた。

そこで中小企業に寄り添うベンダーが必要と考え、平成4年に自ら情報システム会社「システム研究所」を起業。世はオフコンがまだまだ勢力を持つ時代で、県内の大手システム会社からはオフコンの取扱いを勧められたが、頑なにパソコンにこだわった。

こうした中で、時代の流れは徐々にオフコンからパソコンへとシフト。起業から3年が経過した平成7年には「ウインドウズ95」が発売となり、その操作性やアプリケーションの多さ、インターネットとの接続性の良さから爆発的なヒットとなり、パソコンへの注目度が一気に高まった。システム研究所でもパソコン教室を開設。連日多くの受講者で賑わった。

フィロソフィ ～相手を思いやる心～

順風満帆に見えた事業運営だったが、20期目となる平成24年に初めて赤字転落の憂き目に遭う。多くのシステム会社が創設され、追い上げが急になったことと、大手ベンダーの間に挟まれ、苦しい事業運営を迫られた。

そこで出会ったのが故稲盛和夫氏の「会社は社員と家族のためにある」という言葉だった。梅田氏も会社の運営には「地域性」や「社会性」を重視してきたつもりだったというが、稲盛氏が唱える「相手を思いやる心と利益率2ケタの経営手法を両立し、物心両面で幸せになる」という考え方は、梅田氏に強い衝撃を与えたという。

この考え方に共感した梅田氏は自社に「アメーバ経営」の手法を導入。チーム採算性や時間的付加価値の考え方を自社に取り入れた。その一方で、チームが上げた利益を会社全体で享受するために、社員全員が「相手を思いやる」＝「フィロソフィ」の心構えも同時に浸透を図ったところ、業績は再び成長軌道に乗った。現在でも全社で月2回の清掃奉仕活動に加え、週1回は社内でフィロソフィ研修を実施するなど、心の根幹部分をしっかり固める努力を続けている。

フィロソフィ（相手を思いやる心）を持ち、今も会社周辺の清掃奉仕を続けている

子や孫に誇れる街を

福井市中心部には幼い頃から慣れ親しんできた強い思い入れを持つ。足羽川や足羽山などの自然に加え、立派なお堀と歴史のストーリーが点在し、美味しいグルメも含めて「福井市には無限の魅力が有る」と力を込める梅田氏。一方で、まだまだ情報発信が足りないとも感じており、アリーナを新たな起爆剤として県都・福井市の発信力を高め「子や孫たちに胸を張って誇れる街にしたい」と締め括ってくれた。